ざっと昔あったと

むかし、貧しい男が旅をしていました。

ある夕暮れ時、ようやくある村にたどり着きました。宿に泊まるお金もなかったので、そこにあつた薬師やくしさまのお堂に入って寝ました。

夜中ごろ、シャンシャンシャンと、馬の鈴の音が聞こえて来ました。鈴の音はお堂の前まで来て止まりました。そして、

「これから行ってまいります」と声が出て、またシャンシャンシャンと音をたてて、どこかに行つてしまいました。

それからずいぶん経つて、さっきの鈴の音が、またシャンシャンシャンともどつて来ました。すると、薬師さまが、

「今夜はだれとだれの縁を結びなされたか」とききました。

馬に乗つておられたのは、出雲いずもの神さまでした。出雲の神さまは、

「このお堂のお客と、今夜生まれた女の赤ん坊を結んでまいります」と答えました。

男は、たいそうおどろきました。

「なんだと。これは大ごとだ。赤ん坊と結ばれては、たまるもんか」

男は、お堂を飛び出して、村じゅうの家を一軒一軒探しまわりました。すると、明かりがついている家があつて、中から、生まれたばかりの赤ん坊の泣き声がありました。男は、家の戸をガラツと開けて、

「今夜は遅くなつてどこにも行かれないから、どうか泊めてください」とたのみました。

家の主人は、

「申し訳ないが、今夜は赤ん坊が生まれて、取りこんでいるから、よそへ行ってくれ」と断りました。けれども、男はむりやりその家に泊めてもらいました。そして、家の者たちが寝てしまうと、赤ん坊の首を脇差わきざしで突いて、逃げてしまいました。

男は旅を続けました。

あるとき、道ばたの石に腰をかけて休んでいると、石の下から親子のねずみが、ちよろちよろと出て来ました。親ねずみは、男に、

「この子を伊勢参りに連れていってくれませんか」とたのみました。男は、

「連れて行ってやりたいが、おれは、一銭も持っていないから行かれないよ」といいました。親ねずみは、

「お金は、道中、この子がかせぎながら行くから、どうか連れて行ってください」と一生懸命たのみました。そこで、男は承知して、子ねずみといっしょに出かけました。

子ねずみがお金をかせいで、無事、伊勢参りをすませました。帰り道、お金が無くなったので、子ねずみは、金持ちの蔵に入って、金箱をかじり始めました。ところが、家の人が、その音を聞きつけて、蔵の戸を開けて入って来ました。

「それっ！ねずみが出た！」と、家の人たちは、子ねずみを追いかけて回しました。子ねずみは、やつとのもので逃げ出しました。けれども、たたかれて、大けがを負っていて、はらわたを引きずりながら、男の所にはつてもどりました。子ねずみは、男にいいました。

「行きたい行きたいと思っていた伊勢参りに連れていってもらって、あなたのおかげで願いがかないました。思い残すことはありません。おれの死がいを持って帰って、そのことを母さんに伝えてください。母さんはあなたにお金をたくさんくれるというでしょう。でも、お金はいらないから、この家の宝をくれといってください」

子ねずみは、そういうと、死んでしまいました。

男は、いわれたとおり、子ねずみの死がいを持ってもどりました。すると、親ねずみが出て来て、

「ご苦労をおかけしました」といいました。男は、

「いや、大事な息子さんを死なせてしまったて、なんとも申しわけない」といって、子ねずみがいい残したことを伝えました。親ねずみは、

「思いがけなく願いがなくなって死んだんだから、あなたが案じることはありません。どうぞ、うちに来て、休んでください」といいました。

「だけど、おれは、この石の下にはとても入っていけない」と、男がいうと、親ねずみは、

「目をつぶって、わたしの腰をちよつとつかんでいてください。すぐに着きますから」といいました。

男が目をつぶって親ねずみの腰をつかんでみると、まもなく、

「目を開けてください」と、声がしました。目を開けると、広々としたきれいな場所に

出ていました。

「むこうに見える白壁造りの家が、うちの家です」

男は、ねずみの家に行つて、たいそうごちそうになりました。

やがて、親ねずみが、

「これは、ほんのちよつとだけでも」といって、おぜんやまがきいろに、山吹色の小判を山のように盛つてさし出しました。男は、子ねずみに教えられたことを思い出して、

「お金はいらぬから、この家の宝をください」といいました。すると、親ねずみは、奥からぼろぼろのずきんを出して来て、

「うちの家の宝はこれだから、持つて行ってください」といいました。男は、がっかりしましたが、自分がいったことだから、しかたがありません。ぼろずきんをもらつて親ねずみに送られて、地上にもどりました。

男は、石に腰をかけて、

「こんな物をもらつてもしかたがない。捨ててもいいが、せつかくもらつた物だからなあ」と思いながら、ずきんをかぶりました。

ちようどそのとき、西の方から一羽、東の方からも一羽、からすが飛んできて、木に止まつておしゃべりを始めました。

「人間というのは、ばかなもんだ。なんにも知らないで」

男は、ふしぎに思つて、ずきんを取つてみました。すると、カアカアという鳴き声しか聞こえません。ずきんをかぶると、人間の声で話しています。

「京都の禁裏きんりさまは、ご病気で、明日をも知れない命だが、人間というのはばかなもんだ。なんにも知らないで、医者だの薬だのといっている。あれは、館を建てるとき、屋根に白へびをまきこみ、軒のきにはなめくじをまきこみ、土台の下にはかえるをまきこんだので、その三匹がたがいに飲もう飲まれまいと争っているからなんだ。三匹かちがわを鴨川に投げて捨てれば、禁裏さまの病気は治るのになあ」

男がずきんを取ると、からすは、カアカアと鳴いて東と西に別れて飛んで行きました。

男は、占うらない師のかつこうをして、禁裏さまの館に行きました。そして、

「分からないことを、なんでも占います」と呼ばわれました。館では、お医者や薬の効き目がなくて困つていたので、さっそく、占いを頼みました。男は、占いのまねごとをしてから、いいました。

「この館を建てる時、屋根に白へびをまきこみ、軒にはなめくじをまきこみ、土台下にはかえるをまきこんだのです。それがたがいにも飲もう飲まれまいと争っているから、ご病気が治らないのです。三匹を見つけて鴨川に投げ捨ててみてください」

館の人たちは、すぐに探しました。すると、白へびとなめくじと見えるが見つかったので、鴨川に投げ捨てました。禁裏さまの病気は、うそのようにすっかり治ってしまいました。

禁裏さまはたいそう喜んで、男にたくさんのおびをくれました。そして、

「わしの十二人の妃のうち、一番気に入った者を妻にせよ」といいました。男は、お妃をひとりひとり見て回って、一番器量よしのお妃を妻にしました。

男と妻は、仲良く幸せに暮らしはじめました。妻は、首に大きな傷あとがありました。あるとき、男が妻に、傷のわけを聞いてみました。妻は、

「この傷は、わたしが生まれた晩に、うちに泊めてやった男が脇差で突いたあとなんですよ」といいました。男は、

「縁というものは恐ろしいものだ」と思いました。

出雲の神さまが結んでくださった縁は、こわしてはならないということです。

いちがさけえもうした

村上郁 再話

資料 『河童火やろう』 石川純一郎編／桜楓社